

名作
の
旅
2

朝日新聞社編

朝日新聞社

世界名作の旅 2

昭和四十一年四月二十八日第一刷発行
昭和四十一年七月二十五日第二刷発行

定 価 五百円

編 者 朝日新聞社

発行者 朝日新聞社足田輝一

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

© 朝日新聞社 一九六六年

東京 名古屋
大阪 北九州

目

次

マルタン・デュ・ガール
チボー家の人びと

9

トルストイ

アンナ・カレーニナ

23

ゲーテ

若きウェルテルの悩み

38

ミツチエル

風とともに去りぬ

46

ワルタリ

エジプト人

54

シング

海へ乗りゆく人びと

62

蘇東坡

赤壁の賦

70

サガン

悲しみよ　　こんにちは

78

イブセン

人形の家

87

ダンテ

神曲

95

スタインベック

怒りのふどう

103

老舎

駱駝祥子

112

モンテ・ニユ

随想録

121

コッローディ

ピノツキオ

129

コナン・ドイル

バスカビル家の犬

137

シラー

ウィルヘルム・テル

146

ジード

田園交響楽

155

スチーブンソン

スチーブンソンの復活

163

■ カラー写真三十二ページ

■ 箱貼りの写真・南北戦争当時の旗や大砲をかざっている
も南部人気質をみせている店（アトラシタ
市で「風とともに去りぬ」より）

題字 岡島伴郎

地図 吉沢家久

世界名作の旅

2

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

チボー家の人びと



はじめに——マルタン・デュ・ガール（一八八一—一九五八）は、代々裁判官、判事を職とする家系に生れた。父は、パリ市初審裁判所の代訴人だった。後年、彼の小説にみられる精密な史実と構成力は、この家系が生んだものといえるかも知れない。ソルボンヌ大学文学部からパリ古文書学院に学び、卒業論文にジュミエージュ修道院遺跡についての考古学的論文を書き、優秀な成績だった。最初の長編小説『生成』のあと、フランス中をゆるがしたドレフュス事件を背景にした大作『ジャン・パロワ』を書いたが、出版社にこれは小説ではない、調査資料だと断られた。結局、アンドレ・ジイドの推薦で出版され、第一次大戦直前の青年たちの大きな共感を得た。彼は大战と同時に動員され、講和条約締結まで戦争を直接体験した。その翌一九二〇年から三九年まで、十九年を費やして創作された『チボー家の人びと』は、彼の戦争体験が熟し、発酵し、結晶したものである。この八部十一巻の大作は「一九一八年十月三十日衛戍病院において、死は、きみが至純にして悩める心の中に熟しつつあった逞しい作品をこぼち去った」友人にささげられている。

第二次大戦中は、ドイツ軍のブラックリストに載せられたため、フランス国内で転々と居を移した。その間、次の大作『モーモール大佐の回想』の執筆にかかったが、健康がすぐれず、この作品を未完成にしたまま、一九五八年八月二十二日心筋炎発作で死んだ。

彼は晩年の回想で「いくたびとなく『戦争と平和』を読みかえしながら、決定的に小説を書こうと決心した」と、作家になった動機をのべている。「チボー家の人びと」という大河小説もまた、トルストイの『戦争と平和』の強い影響をうけて、書かれたものだ。

ここに描かれているのは、第一次大戦を境に、十九世紀から二十世紀へと転換する歴史の中での、一群のフランス人たちの運命である。カトリックのチボー家とプロテスタントのフォンタナン家、そのなかで成長する若者たち——チボー家の激情的なジャックと、自制的な兄のアントワヌという兄弟の性格対比を軸にして、物語は展開される。また第七部『一九一四年夏』は、彼一流の史料を駆使し、革命と戦争の間で激動する歴史の悲劇をとらえた巨巻である。この部分に対し、一九三七年ノーベル文学賞があたえられた。この小説が、文学好きの人たちに読まれるだけでなく、いまも広く若い人たちに愛読され続けているのは、そのもつ強烈なヒューマニズムのためだと思われる。文中引用した山内義雄氏訳は一九三八年（昭和十三年）にはじめて紹介されたが、戦争中は『一九一四年夏』の部分の出版が禁じられ、一九五二年にはじめて完結した。名訳の評価が高い。

1

手にとると、軽い、純白なわた毛だった。プラタナスの実からはじけた綿だと、教えてくれた人がいた。それが、いつ降りだしたのか、無数に、吹雪のように、セーヌの川岸を乱れとん

でいた。手のひらにのせ、フツと吹くと、また吹雪の中に帰っていく。その下で、ジェラニウムの花が炎のように、真赤に咲いていた。パリの夏。ジェラニウムのにおい。そのなかを歩きながら、私は『チボー家の人びと』の主人公、ジャックの青春を思い浮べた。

一九一四年夏のある夜、ジャックはパリのテュイルリー公園にいた。人気のない、深夜のベンチにひとり、身を横たえる。強烈な、むれるようなジェラニウムのにおい。彼はジェンニーに愛を告白してきたところだ。

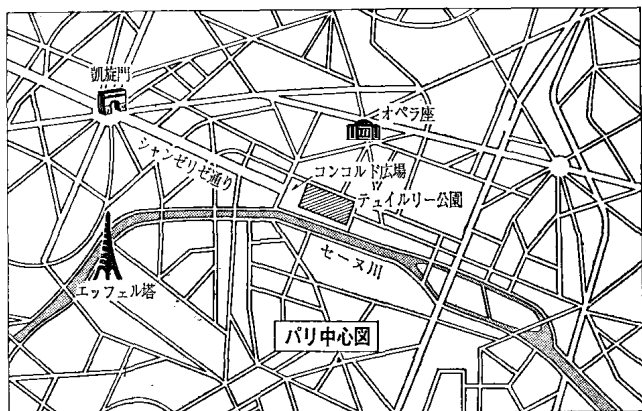
「だれひとり、ぼくが愛するように、きみを愛した人はいんだ」

そういったとき、革命家ジャックの心には革命も、戦争もなかった。そしていま、ひとりになって、彼はただ、眠ることを恐れている。愛の飲びを味わいつづけるため、じっと目をあけて、あかつきの微光を見つめ続ける。

その数週間後、第一次大戦は始まった。戦争は、ジャックの青春と愛を、こっぴどみに粉砕してしまふ。兄のアントワーヌにしても、同じことだった。火のような弟に対し、水のように冷静で、聡明で、節度ある兄だ。医者としての、あらゆる未来が約束されようとしていた。だがそんなことは、戦争の前には、何物でもない。ほんのわずかな毒ガスの量が、彼を殺し、彼のすべてを無にしてしまふ。

作者マルタン・デュ・ガールが、この小説で描いたものは、結局、青春の墓標ではなかったか。墓碑を刻む彼の筆は、克明で、冷静で、しかも慟哭と憤怒に満ちている。チボー家の兄弟

を軸に、戦争の虚無と破壊を書きあげるのに、彼は十九年をついやした。十九年の歳月は、あるいは長すぎたのかも知れない。この大河小説が完成したとき、二十世紀は二つ目の世界戦争



に突入し、さらに大きな墓標を要求していたのだから――。マルタン・デュ・ガールは、二つ目の墓碑を刻もうとはしなかった。ただ、チボー家のアントワヌに、こんな悲痛な言葉を吐かせているだけである。「二十世紀の人間などから、どうして真に偉大なものが期待できよう？」

午前四時すぎ、シャンゼリゼの大通りを私は歩いたことがある。

あの、花やかなパリは、どこへいってしまったのか。目を奪うショーウィンドーもなければ、観光客や若者たちで、花が咲いたようなカフェーもない。シャンゼリゼの出发点になる凱旋門の下で、「無名戦士」のための永遠の火だけが、ただ風にゆらめいていた。ひとりたたずむとき、その火がなんと心にしみるのだらう。やがて、コンコルド広場の空が、オペリスクの上で白みはじめる。エッフェル塔が、うっすらと姿

をみせる。凱旋門、オペリスク、エツフェル塔——そうしたものが、観光パリの商標だけではないことを、曉だけが教えてくれるように思った。

ある日、偶然知合った画家のダニエル君は、やせた、青白い、物思いに沈んだまなざしをもった、二十七歳の青年だった。私は、彼が従軍したというアルジェリア戦争の話をききたかった。エツフェル塔に近いアトリエを訪ね、その話をきくうちに、アルジェリアでの戦争体験がこの青年にとってどんなに深い傷だったのか、その傷をどんなに大切に思っているのかが、口ぶりからありありと感ぜられた。ダニエル君はいつも、アルジェリア人の自由と独立を信じ、それを支持していたのだという。その彼が、自分で志願し、アルジェリア人のFLN（民族解放戦線）を相手に戦った。

なぜ？

「ぼくは人殺しの目撃者になりたかった。愚劣なことを自分の目で見たかったのだ」という。彼は望み通り、フランス軍がアルジェリア人に加えた残虐、暴行の数々を見た。ヘドが出るほど十分に目撃した。アルジェリア側のテロも、同じように残酷だった。どちら側が最初に手を出して、どちら側が報復だったのか——そんなことは、彼にとつては無意味な質問だ。ただ一つ、確かな答えは、軍人は敵も味方も区別なく、子どもがオモチャをよろこぶように、いつも戦争が好きで、戦争に酔っぱらうものだということだった。

ではダニエル君は？ 彼はいつも目撃者だったのか？

私の問いに、彼は憂うつそうに首をふった。彼はアルジェリア人を撃ち殺したのだ。やはり目撃者でさえ、いられなかった。

「自己防衛のために？」

私の出した助け舟にも、彼はもう一度、首を大きく横にふった。

「アントクシカシオン！」

狂気、中毒、陶酔……答えはそれだけだった。

少なくとも自分だけは、ほんとうのフランス人であると信じたかった。だが一人として、信用してくれるアルジェリア人はいなかった。鉄砲を撃ちながら、「友人だ」とさげんだところで、何になろう。ダニエル君は、ちょっと自嘲的（じちやうてき）な笑いを浮べた。彼はついに戦うことを拒否し、軍法会議にかけられた。下士官から一兵卒に降等され、最も危険な最前線に配属された。まもなくドゴール將軍がアルジェリア独立を認めた。

ダニエル君は、政治家を信用してないという以上に人間を信じていないようにみえた。「悪いのは政治のせいだ」という考え方に、何度も強く反発して「人間性の問題だ」といつていた。政治が何を解決してくれるのか——それは、革命に命をかけるチボー家のジャックにとって、いつものどを締めつけられるような苦しい問いだった。人間のいやなところは現在の社会の結果だ、とジャックは自信をもつていきれなかった。彼の人生とは、人間を信じ切ろうとする内面的な闘いだったともいえるだろう。だから彼は、使命感にもえた仲間の革命家たちに向ってどなるのだ。